

## 祖国への道

—シンガポールで終戦を迎えた一人の青年の証言—

商学部1回生 牧野弘

「大本営発表、帝国陸海軍は8日未明、西太平洋において、米英軍と、戦闘状態に入れり」太平洋戦争中846回行われることになる大本営発表の第1回放送である。1941年12月、神戸高等商船学校の寮の1室で一人の青年がこの放送を聞いていた。翌年、三井船舶の二等航海士となった若者のもとに「船員徴用令」が下された。一等航海士になることを夢見ていた16歳の春であった。

1944年6月8日深夜、暗闇の中を1隻のタンカーが滑り出した。汽笛もドラもない静かな出航であった。続いて1隻、また1隻…次々に滑り出す大小様々な船。タンカー、汽船、海軍の護衛艦等、合わせて50隻の船が夜の闇に紛れて鹿児島港を出港した。青年はその船団のタンカー「南海丸」に乗船していた。船団は、奄美、沖縄、台湾、マニラ、ボルネオを經由して、順調に行けば、2ヶ月あまりでシンガポールに着く。船団の任務は、主に兵士の輸送と東南アジアでの石油基地からのガソリンの輸送という大変危険なものであった。

開戦以来、日本軍は、香港、マレー半島、フィリピン、ジャワなどを次々に占領。翌1942年にはシンガポールを占領、以来、シンガポールは昭南島と呼ばれるようになっていた。日本政府は、これら東南アジアの豊かな資源を確保したことにより長期戦態勢は整ったと強調していたが、ミッドウェー海戦で致命的な打撃を受け、太平洋戦線の主導権は米国に移り、戦局は連合軍有利に転換していた。しかし、多くの国民はその事実を知らされてはいなかった。

船団は、魚雷に当たりにくいように、三角形、ひし形、と船団の形体を随時変えながら、台湾までは全隻が辿り着くことが出来た。台湾の高雄で新たに日本郵船の「浅間丸」が加わった。日本最大の外洋客船としてその名を馳せた「浅間丸」であったが、そんな日本の誇る豪華客船も、海軍により徴用され、軍事物資の輸送に携わっていた。浅間丸は船団と共に昭南島に向かい、そこで第一師団の兵士5千人と便乗者2千人余りを乗せて、再び高雄へ帰る予定であった。

7月18日午前2時。船団は南シナ海を南南西に向かって航行していた。勤務を終え、三等航海士と交代した青年が操舵室から出ようとしたその瞬間だった。ドーンという耳をつんざくようなすさまじい爆音と同時に、足元から突き上げられるような衝撃を受け、もんどりを打って床に叩きつけられた。目も眩むような痛みで気を失いそうになりながらも何が起きたのかを十分に理解することが出来た。魚雷だ。起き上がる間もなく、次第に船体が傾いていくのがわかった。若者は容赦なく海中に投げ出された。南海丸は跡形もなく海の藻屑と消えた。青年は破壊された船体の木片にかろうじて掴まって漂いながらも次第に襲う疲労と睡魔に沈み込んでいった。青年が意識を取り戻したのは「浅間丸」の船内であ

った。船団は、それから 2 度も米国の潜水艦による魚雷攻撃を受け、昭南島のシティ港に辿り着いたのは浅間丸の他に僅か 3 隻であった。沈没船の乗組員の中で青年のように運良く救助された者は僅かであった。青年は生き残った船に乗り込み、インドネシアのバレンパンとボルネオのバルクバパンにある石油基地から、昭南島の陸軍本部にある石油備蓄タンクにガソリンを輸送する任務に当たっていた。その青年の元に「浅間丸沈没」の情報が入ったのは 11 月初旬だった。浅間丸は、昭南島シティからマニラに向かい、そこで 29 部隊と便乗者、計 1850 人を乗せ、駆潜艇鷲と第 17, 18 海掃艇に護衛されて高雄へ航行中、東沙島東南東 110 キロ、北緯 20 度 17 分東経 117 度 38 分のバシー海峡で、アメリカ潜水艦アデュールの発射した魚雷 2 本が右舷補機室と第 5 船倉後部に命中し船内機能停止、船尾より沈下。直立状態で沈没し、兵士、乗組員並びに便乗者計 550 人が死亡した。

太平洋戦争中に徴用された船は約 1 万隻。船員徴用された乗組員は約 10 万人。徴用中に沈没した船は数千隻計 800 万 t。死亡した船員は 6 万人とも 7 万人とも言われる。

南シナ海で浅間丸が壮絶な最期を遂げた頃から、日本本土はサイパン島を基地とする米空軍の空襲を受けるようになった。1945 年 4 月、グアムから発進した約 55 万人の米軍大艦隊が沖縄本島中部西海岸に上陸し、太平洋戦争において最初で最後の地上戦に突入した。沖縄では多数の市民を巻き込んで 3 ヶ月に及ぶ戦闘が行われた。沖縄戦での犠牲者は日本軍 9 万人余、一般住民 12 万人余にも及んだ。7 月 26 日、米英中の三カ国首脳は、日本に対し無条件で降伏することを要求する「ポツダム宣言」を発表。8 月 6 日、アメリカは、ポツダム宣言を受け入れようとしない日本に対して開発されたばかりのこの世で最も恐ろしい兵器「原子爆弾」を広島に投下した。

1945 年 8 月 15 日正午、軍部の度重なる妨害を退け、敗戦を告げる玉音放送が流れた。戦死戦病死者 155 万人。一般国民の死者 30 万人という犠牲者を出して、太平洋戦争はここに終結した。

9 月 27 日、ジャワ島の石油基地からいつものように航空ガソリンを積んで昭南島のシティ港に帰ってきた青年は、港の様子がいつもと違うことに気づいた。司令塔の陸軍曹の姿がどこにも見えないのである。陸軍曹だけではない。港に配置されているはずの兵士の姿もないのである。その時、青年の船にライフルを手にした大勢のオーストラリア兵が乗り込んできて、たちまち乗組員を包囲した。そして動揺する彼らに言った。

「あなた達日本は戦争に負けたのですよ」

日本が無条件降伏をしたことを知らされても、青年はすぐに信じるができなかった。オーストラリア兵は、青年たちが民間人であることを確認すると彼らには危害を加えず、船にある金品を全て持ち去った。身包み剥がれた乗組員たちは白い衣服を破り、それを振

りながら上陸した。すると今度は英兵がやってきて彼らをキャセイビルへ連行した。そこで更に厳しい身元検査をされた後、日本の民間船員であるという証明書を持って、キャセイビルから 30 km 以上離れたチャンギーという町に連行されることになった。チャンギーまでの一本道、赤道直下の照りつける太陽を遮る物は何もなく、耐え難い喉の渇きと暑さの中、皆、ひたすら歩き続けた。まだ、日本という国に、いや、自分自身にすら何が起きているのか、ましてや、自分たちはこれからどうなるのかなど理解できぬまま、ただ歩き続けるしかなかった。シティを抜けて、カトンの村に差し掛かった時、道端にシンガポール人が数人やって来て、いきなり石をぶつけてきた。沿道はたちまち大勢の華僑やシンガポール人で一杯になった。そして口々に、「ばかやろう！まぬけやろう！」などと、片言の日本語で罵声を浴びせ掛けながら、石をぶつけてくるのである。シンガポールの人たちは、占領時、日本語を話すことを強要されていた。「占領」という事は、これほどまでに憎しみを与えるものなのか。彼等が軍人ではなく民間人であるということなど、シンガポールの人々にとっては、どうでもいいことなのだ。彼等にとって、自分たちの国を占領した「日本人」は皆同じなのである。その事実を、若者たちはチャンギーに着くまでに思い知らされたのである。

チャンギーには、ジョーホール水道を渡りマレー半島に逃走を試みたが失敗し連行された日本の軍人や民間人約 1 万 2 千人が収容されていた。そこで身元確認を行ったあと、民間人であることが証明された若者たちは、さらに 60km ほど離れたジュロンという村に送られた。そこには日本人抑留キャンプがあって、1 万人近くの日本人が収容されていた。その多くは船員や商社マンとその家族であった。民間人の抑留は、軍人の捕虜収容所に比べると比較的自由に、英軍の管理化であったが、ほとんど英兵が現れることはなかった。逆に言えば放置されたわけであり食糧も含めて自活を強いられたのである。このジュロンのキャンプは、日本南方派遣軍の「あかつき部隊」が最後にキャンプを張っていた場所であったが、終戦と同時に、バラックやテント、大量の米や芋などをそのままにして逃亡していた。しかし、その食糧では到底 1 万人の腹を満たすことはできず、人々は、戦争で荒れ果てた土地を素手で耕し、畑を作り芋や穀物を植えた。時には、カタツムリ、トカゲ、蛇までも食べた。生きていく為であった。無論、水道などあるわけはなく、1 日 2 回やってくるスコールの雨水を溜め、炭で濾過して飲んだ。キャンプの周辺にはゴムの樹が多く、ゴムの樹の下に放置されていた樹液採取用の器を拾い集め食器にした。生きる為にあらゆる知恵を振り絞り、置かれた環境を最大限活用した。これから自分たちはどうなるのだろうか、祖国に帰れる日はくるのだろうか、祖国は今どうなっているのだろうか、そして何より愛する家族は無事であるのだろうか…いつまで続くのかわからない異国での抑留生活の中で、彼らは懸命に生きた。しかし劣悪な環境の中、祖国への想いを胸に病魔に蝕まれ命を失う者もいた。近くに潜んでいた中国やシンガポールのマフィアの残党に襲われることも一度や二度ではなかった。しかし、皆必死で戦った。生きて生き抜いて祖国に帰るため

であった。

若者は、キャンプに来て初めて広島長崎の原爆を知った。一瞬にして、町を草木も生えぬ焦土に変え、人々は跡形もなく燃え尽きた…恐ろしさと悲しさで身体が打ち震えた。若者は故郷に思いを馳せた。若者の故郷は、広島からそう離れていない瀬戸内海に浮かぶ小さな島であった。自分にはもう帰る場所などないのではないだろうか…押し寄せる不安の中でも、明日を生きるために気力を振り絞らねばならなかった。

ある日、シンガポールで映画館を経営していた男が、所有している映画を上映する許可を英軍から得、簡単な野外スクリーンで日本の映画を上映した。映画は人々の心を癒し、望郷の念から皆涙したのであった。

若者がジュロンの日本人抑留キャンプに来てから4ヶ月あまり経った11月下旬、英国軍本部は、抑留日本人の日本への送還を決定した。抑留されてからというもの、懸命に明日に命を繋ぎながらも、生きて祖国に帰ることはできないのではないかと…誰もがそう思っていたからキャンプは喜びで沸きかえった。しかし、1万人を超える抑留日本人を一度に船に乗せるわけにはいかず、数回に分けて送還されることになった。老人や病人が優先されたので若者は次の便になったが、若くて健康であったから問題はなかった。復員が決まってから船員キャンプの者たちは皆リュックの修理を始めた。故郷に帰るのにボロボロのリュックでは格好悪いと、誰からともなく言い出したのだ。それぞれの想いを胸に復員の日を待ち焦がれつつ、楽しそうに何も入れるものなどないリュックを縫い続けた。さらに2ヶ月が経過した1年半ば、次の復員船がシンガポールに到着した。終戦後にオランダに押収されていた「長蘭丸」という8千tの客船で、残った抑留者全員を帰国させることができるとの嬉しい知らせであった。出発の日には朝から晴れ渡っていた。キャンプから3km先の英軍駐屯地から軍のトラックで約60km離れたシティ港まで移送される手はずであった。青年はふと、港で拘束された後、チャンギーまで灼熱地獄の炎天下を歩かされた記憶がよみがえり、万が一のために水筒を3つ、リュックの中に忍ばせた。青年の不安は的中した。駐屯所に英軍のトラックはなく、抑留者たちは徒歩で港に向かい始めたのだ。赤道直下の焼けつく太陽の下、気温は40℃を越えていた。途中で力尽きて倒れる者が続出した。道端に倒れこむ人々。彼等はしきりに水を欲しがっていた。しかし、若者は自分の水を与えることは出来なかった。たとえこの水を一口与えたとしても、彼等の渴きを癒すことは出来ないだろう。そして、自分もまた倒れてしまうに違いないのである。渴きを訴える人々を見捨てて、自分のために水を残す。自分はなんと言う残酷な人間なのだろう。今、自分は他人を見殺しにして自分だけ生きようとしている。そんな自分自身に嫌悪の気持ちを抱きながら、若者は震える拳を握り締め、水を求めてくる人々を振り払って、目を瞑って泣きながら走った。「少しでも早く自分だけでも港に着こう。そして英兵に連絡しよう。トラックをもう一度出して、倒れている皆を拾い上げて運んでくれるかもしれない。」若者は炎天下を休むことなく歩きつづけ、夕方にはシティの港に辿り着いた。そこには夢にまで見た

復員船「長蘭丸」が8千tの巨体を静かに横たえていた。4千人で出発した抑留者のうち、港に辿り着いたのはたったの2百人足らずであった。若者は港の英兵に事情を説明した。英兵は手違いを詫びると、直ちに英軍の輸送用トラックを手配した。それから2時間ほどの間に次々とトラックが到着した。運ばれてきた者は皆、真っ黒に汚れて、中には全身傷だらけの者もいた。倒れたとき現地民に襲われたのだ。戦争は終わっているのに、憎しみだけは消えないことを物語っていた。祖国への想いを新しいリュックに詰め込んだまま、炎天下の異国の道で息絶えた者も大勢いた。

夕刻、復員船「長蘭丸」は日本人抑留者3千人を乗せ、静かにシティ港を離れた。そして2月末、広島の大竹港に戻ってきた。祖国への長い長い道のりであった。真冬の日本。気温5度の中、港に降り立った若者は半袖シャツ一枚であった。

半月後、若者は、復員船「すみれ丸」の船員として自ら志願し再び東南アジアに向けて出航した。まだ数万人はいると言われている日本人抑留者を運ぶためであった。

若者…それは私の祖父である。祖父は夏になると必ず戦争の話をする。しかし私は「またか」とは思わない。しっかりと心に刻み込むために何度も何度も聞く。何故なら、私は戦争を経験していないからだ。祖父がシンガポールで抑留生活を送ったのは、今の私と同じ19歳の時であった。私は祖父の体験談を聞く時、自分の身に置き換えてみる。ほんの少し早く生まれていたら自分も戦地に赴いているかもしれない。そう思うと恐ろしきで一杯になる。祖父は、石をぶつけられながら歩いた異国の道を、そして死に行く人を見殺しにした炎天下の道を、一日たりとも忘れたことはないという。戦後も還暦を迎え、人口の4分の3が戦後生まれとなった。戦後60年はあっても70年はない、と言われるように10年後には生の証言を聞くことも少なくなるだろう。混沌とした国際情勢の中で、平和のために私たち若い世代ができること、それは戦争の事実と悲惨さを語り継ぐことだ。語り継ぐことが平和への道に繋がると信じて、これからも生きた証言に耳を傾けていきたい。